

種を越えたいねりをつかむ組織研究を目指して

— 人新世の組織論の問い —

筈 井 俊 輔

1. はじめに

「人新世」(Anthropocene) という語が人文学及び社会科学で言及されるようになって久しい。人新世とは、人類が地球環境を変化させた時代という意味で、完新世に代わる新たな地質時代として位置づけられている。科学的な合意は未形成ではあるが、オゾンホールの研究でノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツェンが2000年に生物学者ユージン・F・ストーマーによる造語を偶然、発して以来、広く用いられるようになった。この語がある種概念として生成した過程については、寺田・ナイルズ(2021)の詳述を参照していただきたいが、ここではまず、社会学者が人新世という語によって前景化しようとする、現代社会と自らが拠って立つ学問の問題について確認しておきたい。

そもそもクルツェンが提起したのは、膨大な量の温室効果ガスが人類によって大気中に放出されたという事実と、それが原因で将来の気候が本来の道筋から逸脱するだろうという予測である(Crutzen, 2002)。なぜ、この事実と予測が社会学者の議論を駆り立てるのか。各論者の主張部分を一旦脇に置くと、彼ら彼女らが問題視するのは、従来の自然に関するものの見方やそれに基づく人間の活動、そのあり方であることが分かる。このことを端的に表しているものとして、議論の動向を整理した立川(2019)はCrutzen and Schwägerl(2011)の以下の言葉を引き合いに出す。

「長らく存在していた自然と文化との障壁は崩壊しつつある。われわれはもは

や『自然』と対立してなどいない。むしろ、自然とは何であり、未来の自然のあり方を決定するのはわれわれなのである。」(訳文は立川, p.151)

同じく篠原(2018)は、人新世をめぐる議論で問われることを次のように述べる。

「人間が人間だけで自己完結的に生きるのではなく、地球において生息している様々な人間ならざるものとの連関のなかで生きているという現実をどう考えるのか、という問題である。」(p.16)

つまり、我々がこれまで自然を、人間の活動の背景として不問に帰してきたこと(Chacrabarty, 2009)が批判されている。

ただこれだけでは抽象的に過ぎるので、比喩的ではあるが従来の「完新世的思考」(Hartd, 2018)を、ドラマを演じる俳優の例で考えてみたい。この俳優はおそらく、特殊な劇を除いて、演技中は自身が立つステージや舞台背景を意識する素ぶりを見せることはない。彼女はそれらがあたかも存在しないかのごとく、ドラマの当たり前の風景として振る舞うのである。あくまで重要なのはドラマの進行であり背景ではない。これが完新世的思考である。

完新世的思考の下では、人間ドラマとその背景の関係は問われず、また、活動が背景に及ぼす影響もドラマが終わるまで問われない。このことは我々の日常生活にも当てはまる。電気や交通網のような社会経済活動を可能にするインフラストラクチャー、規範、制度等は、ひとたび物事が構造化すれば、順調に機能する限り不問に帰される。そうでなければ社会経済活動が進行しないからである。仮に問ってしまったらドラマがそこで中断する。ドラマが中断するとはすなわち、劇中で制作された物事、たとえば大量生産・大量消費の生活様式や働き方、そこから描かれる展望といったものは仕切り直しになる。無論、これは莫大な代償を伴うものである。

とはいえ、ドラマの存続が危ぶまれているという問題が無くなるわけではない。言わばクルツェンは、現在進行形でドラマを演じている我々に対して、

我々が立っているステージが自身の演技で揺らいでいることを人新世という「カンペ」で警告したのである。つまるところ我々は、自らのドラマを中断するか、ドラマの終わりまでしらばくれて通すか、あるいはまた、新たなドラマの形式を創造するか、決断を迫られている。このような含意を受け取った人々がドラマの見直しに取り掛かったのは言うまでもない。

2. 分野横断的な人新世のナラティブ

こうして沸き起こった議論を、Fremaux & Barry (2019) は「人新世のナラティブ」とした上で興味深い分類を行っている。若干、冗長になるがこの分類に沿って人新世の議論の様相を捉えたい。結論を先に述べておくと、この議論が自然科学－社会科学－人文学の分野を超えて行われていること、また、論者の異なる存在論的・認識論的措定で別様に語られていることが明らかになる。

Fremaux & Barry (2019) の分類方法としては、近代性（自然の人工性と支配）を認めるかという軸と、人間中心主義（自然と社会の認識論的二元論）を認めるかという軸で4つに分けるというものである。第1象限から順に、①人間主義－最・近代ナラティブ (Humanist-mostmodern narrative)、②ポスト人間主義－最・近代ナラティブ (Posthumanist-mostmodern narrative)、③ポスト人間主義－ポストモダン・ナラティブ (Posthumanist-postmodern narrative)、④人間主義－ポストモダン・ナラティブ (Humanist-postmodern narrative) と名付けられる。

①人間主義－最・近代ナラティブとは、合理的な人間が非合理的な自然を科学技術で手なずけるという伝統的な還元主義に基づいて語られるものである。その最たる分野として地球工学 (geoengineering) がある。ここでは気温上昇を防ぐために太陽光を反射する成層圏エアゾル注入等の積極的な工学的介入が検討されている。多くの自然科学者の考察がこのナラティブに分類され、ここでは、自然環境の保護はあくまでも人類の生存を第一義的な目的として手段化される。

②ポスト人間主義－最・近代ナラティブとは、人間のみならず自然や物質を

含む非人間もまたエージェントであるという存在論的措定に基づいて、一般的な近代化とは異なる形での近代化を進めようとする語りである。代表的な思想として、ブリュノ・ラトゥールやダナ・ハラウェイらのものが挙げられる。すなわち、自然は元来、生物や人間の文化、社会経済システム、科学技術等、ヘテロな関係にある物事と共進化してきたのだから、人間だけがそれらと切り離された絶対的な存在と見なすのは不当であるという考えである。①と②では、人間と自然の存在論的措定は異なるが、人新世における人間の対応として、自然への積極的な介入とそれによる自然の統御や再創造が認められる点で共通している。このような対応はプロメテウスのと形容される。

③ポスト人間主義-ポストモダン・ナラティブは、4つのカテゴリの中で最もラディカルな考え方に基づく語りである。代表的な思想家としてミック・スミスやエコフェミニストのステイシー・アライモらが挙げられる。彼らの基本的な考えは、人間と自然は相互依存的で有機的に絡み合っているというもので、多かれ少なかれディーブ・エコロジーと呼ばれる環境中心主義(eco-centrism)的な思想の影響を受けている。人間に求められるのは自然への介入ではなく、人間側の政治倫理的な抜本的見直しであるとする。

対して、④人間主義-ポストモダン・ナラティブは比較的穏健な語りである。このナラティブでは、人間と自然の存在論的な同格性や相互構成性は認められず、あくまで両者の認識論的な区別と人間中心性が維持される。だが、人間の利益のための自然への介入を良しとせず、人間側の政治倫理的な見直しを進める点では③のナラティブと軌を一にする。Fremaux & Barry (2019) はさらに、このような人間と自然の二元論を維持したままで、その関係をマネジメントする反省的人新世論が可能だと主張するが本稿では立ち入らない。

前置きが長くなったが、クルツェンの問題提起に対する応答はまず、気候学や生態学、政治学、社会学、科学技術社会論等の理論を土台として展開された。Fremaux & Barry (2019) の分類からは、それらの応答方針を分かち分岐点が、自然と人間とその関係の捉え方にあることが分かる。ここで読者の中には、経営学や組織論で自然と人間についての哲学的議論を持ち出す必要があるのか、

2人以上の人々の活動や生産性のことを論じるだけで良いのではないかと思われる方がいるかもしれない。しかし、それらの前提条件の自然が他ならぬ人間の活動によって揺らいでいる。別の言い方をすれば、存在として不変不動、あるいは、不問に帰しておけると隠蔽されてきた自然が可塑的な対象として立ち現れたのである。この可塑的な対象が人々に視えている時代に、視えなかった時代の組織論を見直すことは順当であろう。では、人新世の組織化のあり方をいかに考えれば良いか。この問いに答えることが、クルツェンへの応答責任だと筆者は考えるのである。

3. 組織論における自然環境の捉え方

組織を取り巻く環境が組織論で重要な研究対象であることは言を俟たない。しかし、自然と人間・組織の関係を問うことから始めて、組織化のあり方を展望した研究は少ない。例外的な教科書としてハッチ（2017）があるが、そこにおいても自然は天然資源や地理的・気象条件、災害をもたらす物的環境としての言及に留まっている。一方で、自然環境保護のテーマでは少なからず研究が行われてきた。とりわけ、国際的関心が高まった1990年代半ば、いわゆるグリーン化や省エネ、環境経営に関する議論が活発化した（i.e. Shrivastava, 1994; 山田, 1996）。

この中でPurser et al. (1995) は、環境保護を組織論で議論するときに生じる認識論的な問題を指摘している。彼らの論文は、「人間中心主義の限界：環境中心的な組織パラダイムを目指して？」（Limits to Anthropocentrism: Toward An Ecocentric Organization Paradigm?）というもので、アメリカ経営学会のAcademy of Management Review誌に掲載された。タイトルにある人間中心主義とは、コギト、すなわち人間の自己意識が在ってはじめて世界が存在するという考え方で、自然に対する人間の優位性を前提とする。Purser et al. (1995) によると、これはルネサンスの時代に考案された線遠近法と、対象の観察によって法則的な知識を得る認識論、人間と自然の二元論の三つの世界認識の方法によって確立したという。この人間中心主義を克服しない限り、環境

保護は組織論において二次的なテーマにしかなり得ず、真にエコロジカルな思考で組織を論じることはできないとして環境中心主義を唱えるのである。このような主張は、上述のディープ・エコロジー思想に非常に近いと言える。

だが、Newton (2002) は人間中心主義の限界は認めた上で、環境中心主義に基づく組織論はユートピア主義であると辛辣な批判を浴びせる。その瑕疵として挙げるのが、グリーン化や環境中心の体制がエコ・ファシズムに陥る可能性が否定できないこと、新しい秩序への転換に伴う混乱や困難が十分に考慮されていないことである。彼は、社会学者のノルベルト・エリアスやジグムント・バウマンを引いて、いかなる秩序も常に部分的かつ一時的であると言う。なぜなら、自律的なアクターが存在する限り、意図せざる相互依存 (unintended interdependence) によって想定通りの秩序化は実現しないからである。その典型例が、自動車の普及に伴う渋滞の深刻化である。ここでは本来、個人の円滑な移動を可能にするはずの自動車や道路網が個人の自由を制限している。要するにNewton (2002) は、こと経営や組織化の方法に関して言えば、人間中心主義に代えて環境中心主義を持ち出したとしても、失敗に終わるだろうと言うのである。

そこで彼は、このような絡み合いの過程を捉えようとするアクター・ネットワーク理論を参考にして組織化のあり方を模索している。それによると、まず必要なことは、「しなければならない」というmustやshouldの論理をトップダウンで振りかざすのではなく、既存の秩序が作られた過程について知ることだという。最終的に彼は、具体的な行動、たとえば環境志向の購買やマーケティング、研究開発等を内外に示すことで、それに共鳴するアクターを増やし、新たな収束的ネットワーク (Callon, 1991) を形成することが重要だと主張する。このようなNewton (2002) の提案は、自然との適切な関係を追求する現実的かつ実践的な方策だと言えるだろう。

さらにHeikkurinen et al. (2016) は、实在論の立場から環境中心主義の可能性を再検討している。特にグレアム・ハーマンのオブジェクト指向存在論とティム・インゴルドの物質の生態学 (Ecology of Materials) を援用して、オ

プロジェクト指向環境哲学 (object-oriented ecosophy) という独自の考え方を提案する。それによると、自然環境には、対象の自律性と対象の内在性、対象の独自性の点で、内在的価値があると主張する。ただ、筆者の哲学的素養の乏しさゆえに、彼らの主張から組織化の実践に関する含意を学ぶまでには至っていない。もっとも、従来の組織論で自然と人間・組織を論じる場合、人間中心主義とどう向き合うかが認識論の問題とされていることは分かる。では、これは具体的にどのような人新世の組織論の問いに落とし込むことができるだろうか。以下ではWright et al. (2018) が提案する5つの研究対象を題材にして、取り組むべき具体的な問いを導きたい。なお、彼らの提案はあくまで人新世における研究対象の列挙で留まっており、その先の考察の責は筆者に帰するものである。

4. 人新世の組織論の問い

人新世の組織論を展開する試みはまだ始まったばかりである。2018年にようやくOrganization誌で特集が組まれた程度で、上述の分野と比べると出遅れていると言わざるを得ない。European Group for Organizational StudiesのOrganization Studies in the Anthropocene: System Change, Not Climate Change (2021年から2026年まで) というスタンディング・ワーキング・グループ (SWGs) もあるが、そこでも人新世に関する組織研究の少なさが問題視されている¹⁾。

この理由の一つとして考えられることは、環境変動を引き起こした主原因が産業革命を経て確立した大量生産体制と大量消費社会にあるからだろう (Shrivastava, 1994)。上の特集の巻頭論文であるWright et al. (2018) が人新世の組織論の研究対象として挙げるものも、このような大量生産・大量消費に関わる組織化である。彼らはそれを①「経済の組織化：平常運転」(Organizing

1) <https://www.egos.org/jart/prj3/egos/main.jart?content-id=1585149883954&rel=de&reserve-mode=active>, 2024年3月19日所収

economics: business as usual) とし、語気を強めて以下のように説明する。

「人新世のトピックは自然科学及び社会科学を超えて知識人や研究者の想像力をつかみ取ってきた。だが、たとえ『平常運転』の軌道が主原因になって、人類や他の種が直面する甚大な生態学的転換があったとしても、企業の役員室や政治的官職、主要メディアにそういった想像力は無いに等しい。グローバル・ビジネスや政治的エリート（そしてまた彼ら彼女らを下支えする経済、金融、経営のプロフェッショナル）にとって地球はこれからも、たんなる天然資源の出所であり、我々の経済廃棄物の掃きだめとしてしか見られないのである。」(p.459-460)

つまり、しらばくれて従来通りの方法で組織化する人々をあえて人新世の組織論では研究すると言う。なぜ人々は、企業は、科学的証拠を示されても行動を変えようとしめないのか、そこにはどのような論理や文化、力が働いているのだろうかと問うのである。したがって、このような組織化の研究者は「平常運転」の外からこれを見なければならぬ。このことは、かつて組織文化の民族誌家が行なったように、自らの属する文化からそれ以外の文化を眺めることとは異なる。人新世で問われていることは、文化的相対性をいかに認めるかではなく、様々な人々の考え方や価値観、歴史があるということを認めた上で、いかに人間を地球の歴史に結び付けて考えるかである（寺田・ナイルズ，2021）。このことを組織論に当てはめれば、これまで人間が希求する理想のために形成され、そのために存在すると考えられてきた組織と、地球の歴史をどのように接続するかが問われている。つまり、組織化とは地球の歴史にとっていかなる現象であるのか、また、そこから見た人間とはいかなる存在であるのかと問うのである。これに答えるためには組織の存在論的考察が不可欠である。

また、Wright et al. (2018) は第二の研究対象として、②「技術の組織化：エコモダンの『良い人新世』」(Organizing technology: the ecomodern 'Good Anthropocene') を挙げる。これは、自然環境を技術的なイノベーションによって「保護」しようとする考え方に基づいて行われる組織化である。括弧書きの理

由は、人新世の議論では保護という語が二つの意味で使われていると筆者が考えるからである。一つ目は、自然にこれ以上、危害を加えるのをやめるという素朴な意味での保護である。この意味での保護は、諸個人が参画するリサイクル活動等の取り組みや、企業のCSR活動でよく使われる。他方で、上でも触れたように、そもそもピュアで手つかずの自然なるものはなく、既に人間化した可塑的な自然が存在するという人新世の自然観がある。これに拠れば、自然の回復や機能性向上のために人が手を加える方策、すなわち、地球工学等の科学技術研究やその実装は自然環境の保護だと言える。さらに、これは人間の責任だとさえ言える。無論、このような自然支配の論理が、少なくとも東洋的自然観と相いれないことは想像に難くない。だが、それと同じくらいに我々が科学技術の発展から恩恵を受けていることも確かなのである。よって、人新世の組織論では科学技術研究を行う組織や、それが実装される労働現場、消費生活で生まれる異種混濁の組織化を描写説明し、そこから組織化のあり方や組織倫理を考察することが求められる。有体に言ってしまうえば、自然をめぐる科学技術（事実）と文化（価値）のもつれにいかにか折り合いをつけるかという難問である。

Wright et al. (2018) は第三の研究対象として、③「抵抗の組織化：気候変動運動及び社会正義」(Organizing resistance: climate mobilization and social justice) を挙げる。これは、自然と人間の既存の関係を批判的に検討する活動の組織化である。Wright et al. (2018) は具体的な組織として、環境保護活動に関わる組織、非政府組織や草の根運動、抗議活動、地域コミュニティ、社会運動等を挙げる。当然、これらの活動をたんに紹介する目的で研究するのではなく、また、擁護するために調査するのでもない。研究者は、仮にダム建設に対する反対運動が組織化されたとして、その地域の地理的・気象条件や、行政や企業、地域住民の関係、地域住民間にある社会構造、コミュニティの文化等、様々なことを調査するだろう。そして、反対運動の背後に過去の植民地化政策に対する抵抗と自己確立の構造を見出すかもしれない。デスーザ (2021) によると、インドでは炭素排出権取引の開始で水力発電用ダムは自然保護という強力な正当性を獲得することになったという。これまで「ネイション・ビルディ

ングのための鉄とコンクリートの巨大ダムに対する闘争」(デスーザ, 2021, p.333)であった反対運動が正当性を失う時、人々は何に対して抵抗していると考えられるのだろうか。ここで求められているのは、自然環境や人新世に関する知識がいかなる権力を生むか、裏を返せば、いかなる権力が人新世の知識を求めているのかを問う反省的思考である。

Wright et al. (2018)は第四の研究対象として、④「オルタナティブの組織化：社会的組織の新たな形態」(Organizing alternatives: new forms of social organization)を挙げる。これは新たな社会のあり方を模索し、その実現のために行われる組織化である。実際の活動としてWright et al. (2018)はコミュニティエネルギー・プロジェクトやトランジション・タウンを取り上げる。トランジション・タウンに関して言えば、これは英国・トットネスから世界各地へと広まった草の根運動である。③で見られるような反対運動とは異なり、ここでは諸個人が化石燃料への依存度の低い暮らしを実践し、自発的な協力を促す分散型のネットワークを形成することが活動指針として掲げられている²⁾。これによって、従来の「システム」の問題を解決しようというのである。これはNewton (2002)が擁護する収束的ネットワークによる組織化であると言えよう。組織化の観点から見れば、このような活動の目的や正当的なやり方はしばしばあらかじめ規定されず、社会的な枠組みや言説、各地域の自然環境の物質性等から複合的にかつ随時、作成される。つまり、組織化の過程自体が様々なアクターに開かれている。人新世という文脈で考えるならば、このような自律分散型の開かれた組織化を地球にいかにつなぐかが問題になるだろう。

Wright et al. (2018)は第五の研究対象として、⑤「文化の組織化：人新世と想像力」(Organizing culture: the Anthropocene and the imagination)を挙げる。これはアートや文学、広告、ポップ・カルチャー等、想像力の産物によって触発され、方向付けられた組織化である。筆者が特に注目するのは、これらの表現によって対話が促される可能性である。Wright et al. (2018)が①

2) <https://transitionjapan.net/>, 2024年3月19日所収

で述べたように、現在、政治的エリートでさえ自然環境に対する想像力を欠いている（たとえば、トランプ政権の環境規制緩和策が挙げられる）。意見の異なる人々が、対話する場さえ持てないとき、イメージやメタファーは大きな力を発揮する。人新世の組織化ではアートや文学といった文化的な取り組みと連携することが求められるだろう。

まとめると、人新世の組織研究の具体的な問いとして次のことが考えられる。第一に、地球の歴史から見た組織の存在論に関する問い。第二に、科学技術研究を行う組織や、それを実装する現場における複合的な要素の絡まり合いと、そこでの労働や倫理、権力、知識に関する問い。第三に、ローカルと地球を接続する開かれた組織化のあり方に関する問い。第四に、想像力を働かせることによる対話と組織化に関する問いである。このように組織化を人新世という地球の時間軸で考え直すと、人新世の組織論とは、種を越えたうねりをつかみ、そのあり方を問う学問として再定義できるのではないだろうか。しかし、くどいようだが、これはあくまでWright et al. (2018) の提案から読み取った差し当たりの見通しに過ぎず、今後、国内外の論考を吟味する中で理解を深めていかなければならない。

5. 終わりに

最後に、人新世の組織論の問いに取り組む上で有効な方法論としてマルチスピーシーズ民族誌を紹介したい。筆者はかねてからバイオ・テクノロジー、中でも生命科学・ゲノム解析研究の応用に着目して、組織化のあり方について研究してきた (i.e. 筈井・吉澤, 2023)。現在は、北海道の酪農におけるホルスタイン種の育種改良技術と牧場経営の共進化に関する調査研究を行っている。この中で見えてきたことは、ゲノム解析研究を中心に様々な物事が巻き込まれる大きなうねりである。2003年にヒトゲノム計画が完了して約20年の間に、牛、馬、豚、鶏などの産業動物の育種改良分野では、既にSNP検査をはじめとするゲノム解析が実用化された。子牛が生まれるとすぐにそのサンプルを検査機関

に出す牧場は珍しくない。こうして得られたデータは繁殖計画のみならず、飼養管理やそれに関わる労働形態、さらには搾乳ロボット等のロボティクス技術や環境科学の見直しに貢献している。このような状況はWright et al. (2018)が提案する「技術の組織化」の研究対象に該当すると考えられ、この調査研究を通じて異種混濁の組織化メカニズムを明らかにしようというのが筆者の目論見である。

この問いに対して筆者は、マルチスピーシーズ民族誌という方法が有効ではないかと考えている。マルチスピーシーズ民族誌とは、人間だけでなく人間以外の動植物や物質を含めた多種の絡まり合い (entanglement) を記述する質的調査法である。方法として打ち出したのはカークセイとヘルムライヒ (2017)とされているが、日本でも文化人類学者の奥野克巳氏や近藤祉秋氏らが早くから研究を行っている。

彼らによると、マルチスピーシーズ民族誌の意義は21世紀に入ってから特に文化人類学者の間で認識されるようになったという。その一つの要因は、生命科学を震源地とする自然や生命、人間存在の揺らぎである。これまで疑われることがなかった人間と動物の境界線は、今や1%のゲノム情報の差でしかない³⁾。また、我々が食物から栄養分を吸収し健康的でいられるのは、体内で生存する微生物の働きがあるからだとも言われている⁴⁾。このような物質的境界線の曖昧さによって、多くの自然と文化のハイブリッドが生み出されている。

たとえば、カークセイとヘルムライヒ (2017) は遺伝子組み換え技術によって作製された商標登録済み生物を挙げる。正確には遺伝子特許取得済の生物を指すのだろうが、法律上の解釈を差し置けば、この生物が自然物か人工物か判別できない状態になっている。またラジャン (2011) が、生命科学 (アカデミア) と資本主義 (企業) がサンプルの徴用をめぐる持ちつ持たれつの関係に

3) ヒトとチンパンジーのゲノム情報の違いは約1%であると言われている。https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2017-11-02, 2024年3月19日所収

4) https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/food/e-05-003.html, 2024年3月19日所収

あることを明らかにしたように、巨視的な観点からも生物はピュアで手つかずの自然ではなくなっている。

ただ確かなことが一つある。それは、その生物が生きていること、何ものかになっていること（生成：becoming）である。そこに、ハラウェイ（2013）やカークセイとヘルムライヒ（2017）、奥野ら（2021）は、人新世における人間のあり方の答えを見出そうとしている。すなわち、「個体Aと個体Bと個体Cが相互作用し、絡まり合うというのではない。絡まり合うことに困って、AなりBなりCなりが生成する」（奥野，2021, p.17）と生物を捉えることによって、人間を地球に接続し、ひとつづきの歴史を紡ぎ出そうとしているのである。いかにも茫漠とした方法のように感じられるが、本来、組織は人間と非人間が絡まり合って生成するものである。そのことを考えると、マルチスピーシーズ民族誌で人新世の組織論の問いに答えようとするのは決して無謀な試みではないであろう。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻・藤田功様（第19期生）、大石俊太郎様（第20期生）をはじめ多くの皆様からご協力とご助言をいただきました。記して謝意を表します。

参考文献

- Callon, M. (1991). Techno-economic networks and irreversibility. In J. Law (Ed.), *A sociology of monsters? Essays on power, technology and domination*: 132-161. Sociological Review Monograph 38. London: Routledge.
- Chacrabarty, D. (2009). The Climate of History: Four Theses, *Critical Inquiry*, 35(2), pp. 197-222.
- Crutzen, P. (2002). Geology of Mankind, *Nature*, 415, 23.
- Crutzen, P. & C. Schwägerl. (2011). Living in the Anthropocene: Toward a New Global Ethos, *Yale Environment* 360.
- Fremaux, A. & Barry, J. (2019). The “Good Anthropocene” and Green Political Theory: Rethinking Environmentalism, Resisting Eco-modernism, In F. Biermann & E. Lövbrand (Ed.), *Anthropocene Encounters: New Directions in Green Political Thinking*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 171-190.
- Hartd, J. N. (2018). Security Studies and the Discourse on the Anthropocene: Shortcomings, Challenges and Opportunities, In T. Hickmann, L. Partzsh & P. Pattberg (Ed.), *The Anthropocene Debate and Political Science*, London: Routledge. pp.84-102.
- Heikkurinen, P. J. Rininen, T. Järvensivu, K. Wilén & T. Ruuska. (2016). Organising in the Anthropocene: an ontological outline for ecocentric theorising, *Journal of Cleaner Production*, 113, pp.705-714.
- Newton, T. J. (2002). Creating the New Ecological Order? Elias and Actor-Network Theory, *The Academy of Management Review*, 27(4) pp. 523-540.
- Shrivastava, P. (1994). CASTRATED Environment: GREENING Organizational Studies, *Organization Studies*, 15(5), pp. 705-726.
- Purser, R. E., Park, C., & Montuori, A. (1995). Limits to Anthropocentrism: Toward an Ecocentric Organization Paradigm?, *The Academy of Management Review*, 20 (4), pp. 1053-1089.
- Wright, C., Nyberg, D., Rickards, L., & Freund, J. (2018). Organizing in the Anthropocene. *Organization*, 25(4), pp. 455-471.
- 奥野克巳 (2021) 「人新世の時代におけるマルチスピーシーズ民族誌と環境人文学」, 奥野克巳, 近藤祉秋, ナターシャ・ファイン (2021) 『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』 pp.5-32, 以文社.
- 奥野克巳, 近藤祉秋, ナターシャ・ファイン (2021) 『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』 以文社.
- カークセイ, S・エベン, ステファン・ヘルムライヒ (2017) 「複数種の民族誌の創発」 近藤祉秋訳, 『現代思想 2017年3月臨時増刊号 総特集 人類学の時代』 45(4),

pp.96-127, 青土社.

篠原雅武 (2018) 『人新世の哲学 思弁的实在論以後の「人間の条件」』人文書院.

立川雅司 (2019) 「分野別研究動向(人新世) 人新世概念が社会学にもたらすもの」
『社会学評論』70(2), pp.146-160.

寺田匡宏, ダニエル・ナイルズ (2021) 『人新世を問う』京都大学学術出版会.

デスーザ, ロハン (2021) 「炭素の森と紛争の河 南アジアの歴史叙述から見た人新世」,
寺田匡宏, ダニエル・ナイルズ (2021) 『人新世を問う』 pp. 309-339, 京都
大学学術出版会.

筈井俊輔, 吉澤剛 (2023) 「市民によるインフラ構築としてのゲノムコホート事業
批判的实在論から見た業務継続のダイナミクス」『組織科学』56(4), pp.4-17.

ハッチ, メアリー・ジョー (2017) 『Hatch組織論 3つのパースペクティブ』大月
博司, 山口善昭, 日野健太訳, 同文館出版.

ハラウエイ, ダナ (2013) 『伴侶種宣言 犬とヒトの「重要な他者性」』高橋さきの訳,
以文社.

ラジャン, カウシック・S. (2011) 『バイオ・キャピタル ポストゲノム時代の資本
主義』塚原東吾訳, 青土社.

山田経三 (1996) 「環境問題の組織論的検討」『組織科学』30(1), pp. 14-26.